上官の苦悩

山内　詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
上官の苦悩

【Ｎコード】
Ｎ１６８１Ｔ

【作者名】
山内　詠

【あらすじ】
積極的過ぎる軍曹から逃げまくる中佐を訪ねたのは、同じ時期に副官を迎えた大佐であった……。
とある軍隊に所属する中佐とその副官である軍曹の物語。逃げる男に追う女。逃げる男・二人の副官続編です。

訪問（前書き）

この作品は短編「逃げる男」「二人の副官」の続編です。
調子にのって続きを書いてしまいました。雰囲気のみのお話です。

訪問

「中佐、嘆願書が届いております……」

ヴァルの補佐官であるグスタフ少尉が申し訳なさそうに束になった書類を差し出してくる。ちなみに副官とは違い、補佐官は上位の士官となるにつれ増える書類仕事や会議の調整など秘書的な業務をこなす者である。なお、もちろん男。

口頭での陳情は受け付けない、書類で提出しろと大挙してやってきた下士官たちを追い返したのはつい先日の話だ。

いつもならのらりくらりと言い訳して提出を先延ばしにしようとするくせに。奴らは訓練などそっちのけで作成したに違いない。そもそも訓練を指揮するはずの下士官たちが連日遅刻しまくっているのだ。まともに訓練なんぞ出来るはずもない。

嘆願書の内容は見なくてもわかる。

要約すれば「さっさと副官とやっちまってください、そんで副官を部屋に閉じ込めておいてください」である。

「この嘆願書の内容は把握しているか」

「はい」

問いかけにグスタフ少尉は頬を赤らめ視線を泳がせながら答えた。士官学校出たてのルーキーには少々刺激が強い内容であるのかもしれない。要約しなければ罵詈雑言と淫猥な言葉だらけなのだから。受け取った嘆願書はずっしりと重い。一体何人分になるのか考えたくない。

「どの程度広まっている？」

「……恐らくもう知らない者はいないと思われます」

副官に上官以外が指一本でも触れればそれが例え合意の上でも触れた者には厳罰が待っている。
間違いが起きる前に所有権を主張してくれ、そしてきちんと管理してくれ、という嘆願は筋が通っていた。

副官を持てる者はそう多くは無い。一応中佐以上で特別に慰労の必要がある者、というのが基準ではあったが、そう簡単には与えられない。他人の羨望を受けるほどの実力か強力なコネが無ければまず無理だった。
副官を得ることはステータスである。軍人の誉れである。ぶっちゃけ軍属の男の夢と言ってもいい。
タリヤ軍曹はヴァルのものになることを望んでいるし了承している。周囲もそれを望んでいる。障害になるようなものは何一つない。

わかっている、ちゃんと理解しているのだ、頭の中では。

タリヤ軍曹がヴァルに体を開くのはヴァルに愛しているからではない。仕事だからだ。
ヴァルの自制心を支えているのは小さな棘のようなその事実。
他人からしたら馬鹿らしい理由だということはわかっている。理由にすらならないこともわかっている。理解してもらえるとも思っていない。いい年してなにやってんだと言われていることも知っている。

ただヴァルは好きでも無い（無茶苦茶タイプではあるけれど）付き合ってもいない（公式の愛人ではあるが）女を喜んで抱ける男ではない。

愛していなければ、駄目なのだ。相思相愛でなくては、いけないのだ。

……自分が面倒な男だってことはよーくよくわかっている。

他人が聞いたら「じゃあはじめっから副官なんて受けるんじゃねーよ」と激怒しそうな理由であるが、副官の任命権を持つのは軍のトップである元帥クラスの人間である。中佐如きに拒否権なんぞ存在しない。ていうか普通なら拒否する人間なんているわけないし。

ヴァルが大きくため息をつくと同時に呼び鈴が鳴った。

「わかっているな」

タリヤ軍曹は通すな。ここ数日あの手この手で押しかけられ続けて止むなく出した命令。

「……了解しております」

端切れの悪い返事をするグスタフ少尉の顔をヴァルはまともに見る事が出来なかった。ある意味一番迷惑を被っているのは彼だからである。

しかし予想に反して来訪者はタリヤではなかった。

「大変そうだね中佐」

ひょいとドアから顔をのぞかせたのは短く刈られた赤毛が印象的な小男ならぬガウェイン大佐であった。

彼は軍服を着ていなければ全く軍人には見えない男だ。何しろ背が

低すぎる。適性検査で撥ねられる寸前ギリギリの身長しかない。それに大きいくせに釣り上がったとび色の瞳と丸顔は実際の年齢よりもはるかに幼く見せる。何も知らなければ彼の年齢を正確に当てることはほぼ不可能だ。
しかしガウェイン大佐は赤毛の猫というふたつ名をもつ優秀な指揮官であった。それはまるで猫のように敵の背後に忍び寄り瞬く間に勝利を決めてしまうその類い稀なる能力を称賛してつけられたものであり、断じて低身長や容姿を皮肉ったものではない。くれぐれもそんなことを言ってはいけない。口にした場合恐ろしいことがおきる。
しかし部下を死なせることを嫌う性格から、下士官や兵からの信頼は厚い。
そしてヴァルにとってはこの基地で友人と呼べる数少ないの人物ひとりであった。

「ご存知の通りだ」

「まあ、気持ちはわかるよ」

お互い浮かぶのは苦笑いばかり。
ガウェインの副官、リーナ伍長は着任して数日たらずで基地中の男共を骨抜きにしてしまっている。何しろ隠したくても隠せない魅力（主に胸）の持ち主だ。
今回の騒動はリーナ伍長とヴァルの副官タリヤ軍曹の周囲を全く無視したやりとりから始まったもので、ガウェインにしても本来ならば二人だけの秘密のはずのベッドの中でのあれこれを散々に暴露されている。

「でもこのままじゃまずいよ」

「ああ、わかっている」

「君、兵たちから二次元にしか興味がないって言われてるよ」

ヴァルの眉間に深い皺が寄る。

激烈に自分好みの女から迫られても拒否してるんだから致し方ないとはいえ、傍観者の意見はぐっさりとヴァルの心に突き刺さった。あんまりだ。だからこれは多少行き過ぎかもしれないが、必要な反撃である。攻撃は最大の防御なり。

「そちらは乳を枕にしないと眠れないと言われているらしいな」

ガウェインのこめかみが引きつる。

押し倒しておっぱいで挟んだ発言によりガウェインは基地中の兵からおっぱい星人に認定されてしまい、あのおっぱいを日々自由にできるなんて……と羨望と嫉妬の眼差しを浴びまくっていた。

「まあインポよりましですよ。あれ？　勃つことは勃つんでしたっけ」

「挟まれたら三擦り半の男に言われたくないな」

このやり取りに、来客用のお茶の準備をしていたグスタフ少尉はコーヒーでなくハーブティーを入れることにした。カモミールかラベンダーがいいだろう。　……どちらもちょっと落ち着いた方が良い。

命令

ほんのりりんごに似たカモミールティーの芳しい香りが執務室に広がった頃、ようやく二人の上官たちのくだらない言い合いはひと段落した。的確に相手の弱点を攻め続けたためにお互い満身創痍になってしまったからだ。
ヴァル中佐とガウェイン大佐は顔を合わせれば一戦やらかさないと気が済まない。なのでこれはいつもの風景である。でも二人の仲は非常に良い。

「まあまあ、立ち話もなんですからお座りになられたらいかがですか？」

グスタフ少尉が肩で息をしている上官たちへ座るように促すと、二人ともあっさりと椅子に腰かけた。
仲裁も慣れたものである。手早くお茶とお菓子（今日はチョコチップクッキー）を差し出せばどちらも大人しくなることも学習済みだ。ちなみにクッキーはグスタフ少尉のお手製だったりする。

「はー、少尉のお茶は美味しいよ。
中佐はいいねぇ、可愛い副官にお茶入れるのが上手い補佐官もいて」

「お前のところにも補佐官いるだろう」

「ディーノ少尉はねー、インスタントが限界。
まあそこまで期待する方が悪いし。クッキーも美味しいよー」

ガウェインの補佐官であるディーノ少尉は驚異的に不器用である。

お茶を入れようとすればカップを粉々にし、菓子を用意しようとすれば床にぶちまける。でもなぜか銃の取り扱いはものすごくうまい。じゃなきゃ軍人には到底なれなかったであろう。

この会話もいつものことだ。グスタフ少尉がありがとうございますと返すとようやくふたりはごく普通に会話を始めた。和んでくれたようで、ほっと一息つく。

扱いの面倒臭い上司をもつと部下は苦労する。だけれど苦労させてくれない上司もまた面白くない。彼はヴァル中佐の伝説のような話を聞いて補佐官を希望したのだが、憧れの奇跡の男がまさかこんな人だとは全く思っていなかった。

だが生身の人間なのだから色んな面があって当然であるし、ヴァルは上司としては面倒だが素直で愛すべき性格の持ち主である。学ぶべきところもたくさんあった。憧れの気持ちは当初とは違う形となったけれど、まだグスタフ少尉の心の中にある。

「僕が何言いに来たかわかってるでしょ」

「……まあな」

「じゃあとっととやっちゃって。そしたらみんな大人しくなるよ」

「無理だ」

そんな即答しなくてもいいだろうに、渋い顔して黙りこむヴァルにガウェインは大きくため息をついた。

「……このまま放置は許されない。彼女たちは僕たちだけのものじゃないんだよ」

「わかっている」

「ならなんでやんないんだよ」

ここで愛だの恋だの言ったら絶対馬鹿にされるとわかっているからヴァルは沈黙するしかない。いっそのこと惚れた相手以外には勃たなきゃいいのに、とも思うが、それはそれでもっと面倒くさい事態である。

今現在この基地にはタリヤ軍曹とリーナ伍長を含め４人の副官が存在する。

元々女性軍人の数は男性の１割程度であり、そのほとんどが通信や衛生、運輸など後方支援の部隊に所属している。そのため現在前線に最も近いこの基地には４人の副官以外は数える程しかいない。副官はもちろん上官を癒すというのが一番の仕事ではあるが、荒んだ兵士たちの清涼剤代わりの偶像（アイドル）としての役割もあった。人気の副官は兵士の間で隠し撮りの写真が出回ったりもする。男の中にポンと無防備な女を放りこんでしまえば恐ろしいことになりかねないが、上司以外は指一本触れてはいけないという規則によって彼女たちは守られる。上官の絶対的な庇護があるからこそ副官は無事でいられるのだ。

この基地最古参の副官となるエステル准尉はすでに４０をいくつか越えた年齢ではあったが非常に美しく、兵には大変人気がある。しかし上官であるディオヘネス中将と結婚しておりさらに２児の母でもあるため、皆そういう対象というよりは純粋にほんわかした憧れの存在という位置づけだ。

そしてもう１人の副官レベッカ軍曹。これがとても残念なことにものすごく不人気なのである。

というのも副官は上官好みの容姿の者が選ばれることになっているのだが、その上官タイラー少将の好みが特殊すぎた。
レベッカ軍曹は一見すると全く女に見えない。凛々しい表情に整った顔立ち、ガリガリの身体はどう見ても美人ではあったが少年なんである。胸もお尻もぺったんこ。さらに彼女の一人称は僕。
タイラー少将は「私のかわいいベッキー」とそれはそれは可愛がっているけれども、兵たちの観賞用にはちょっと向いていない。

今回2人の副官がこの基地にやってきたのは女日照りの男たちのガス抜きをするという意味合いもあったのである。正統派金髪美女のリーナ伍長と豊満なお姉さま系のタリヤ軍曹の人気が出ないわけがない。

ガウェインは懐からするりと書状を取り出すとヴァルに差し出した。

「司令官からだよ」

書かれているのはたった一文のみ。
文末のサインは確かにこの基地の司令官であるディオヘネス中将のもの。

速やかにタリヤ軍曹を名実ともに副官とすること。

「これは命令だよ。わざわざ僕が来た意味、解るよね」

外堀はがっちり固められたな。
渋いを通り越して苦い顔を両手で覆った上官に、グスタフ少尉はお茶のおかわりを注いだ。

過去

お茶をしっかり堪能し、ガウェイン大佐はしっかりクッキーをお土産に貰って帰って行った。彼は甘いものが大好きなのだ。

「……どうすればいいと思う？」

腹の底から絞り出すような声でヴァルはグスタフ少尉に助けを求めた。いい年したオッサンが士官学校出の若造にする相談ではない。どうするもこうするもとっととやっちまえばいいだけの話なのだけれど、ここぞとばかりにグスタフ少尉は問題が発生してからずっと抱えていたとある疑問を口にしてみる事にした。

「……その前にひとつ質問してもよろしいでしょうか」

「かまわん」

「中佐、もしかして童貞とか、そういうことはないですよね」

男は２５歳を過ぎても経験が無ければ魔法が使えるようになるという。既に４０歳に手が届きそうなヴァルがもしもそうなら既に魔法使いどころか何かに変身出来てしまう。

みしり、とヴァルが持っていたカップが悲鳴をあげた。

「少尉がそう思っているならば、基地中の者がそう思ってるということだな」

いいえと即答できないのが辛いところだ。何しろヴァルは普段全く女性に興味を示さない。兵たちにとっては小金を握りしめて一夜の

夢を買いに行くことはごく普通のことであったがそれもしない。これが二次元にしか興味がない（と言ってもアニメではなく雑誌のとか）と思われる所以である。
それどころか博打も煙草も酒にもほとんど手を出さない。補佐官として今まで短い期間だが近くにいて趣味と呼べるものも無いように思う。強いて言えばガウェイン大佐と同じように甘いものが結構好きというくらい。

「女はもういい、という気分だったんでな」

グスタフは思わず息をのみ一歩後ずさった。女はもういいってことは。

「だからって男がいいってわけではないからな」

「……申し訳ございません」

いや、かまわんよ。ヴァルは自虐的に笑いながらまたひとつ大きくため息をついた。その表情はグスタフが初めて目にするもので、話の内容も全く予想外のものであった。

「……初めてはいつだったか忘れたよ。俺の母親は娼婦でな。
相手は母親の薬と酒に酔っぱらったろくでもない友人共だった。
まあまともな初体験ってやつではなかったな」

だから、金で女をどうこうするのは好きじゃない。仕事から帰ってきた母親から客の悪口を散々聞かされて育ったから。にこやかに笑っていても腹の中で罵倒されていると知っていれば正直お願いしたい気分にはどうやったってなれない。
母親の交際相手に犯されたり暴行されたこともある。だから性的な

意味で男も好きじゃない。
ただいつか、この境遇から絶対に抜け出してやるとは決めていた。しかし学校にもまともに通ったことのない貧民街育ちのヴァルがまともな世界に行く方法は、軍隊しかなかった。だから今、ここにいる。

ヴァルが奇跡の男と呼ばれるのは、ただ戦場から死なずに帰ってきただけではない。通常ならどんなに頑張ったとしてもせいぜい曹長がいいところのただの兵だった男が異例の出世を遂げたからだ。それも三等兵から中佐まで上り詰めた。下士官以下の兵士たちの希望の星とも言われている。

「軍に入って、その時付き合っていた女とすぐに所帯を持ったよ。こんなところで死ぬわけにいかない、俺は幸せになってやるんだって。
それだけであの腐った戦場から帰ってきた」

家族ってもんにも、女房ってやつにも憧れててな、絶対守ってやるって思ってたよ。惚れた相手に対するパワーってやつは本当にすごいな。乾いた笑いを織り交ぜながら、ヴァルの話は続いた。そうしたら。

その後は言わない方がいい。
聞いてはいけない。
パンドラの箱を開けてしまったと気付いたグスタフが止める間もなく、ヴァルは言った。

「で、帰ってきたら女房は俺の後釜をもう見つけてた。『死んだと思った』だと、さ」

己の見る目の無さに絶望して、以来まともに女と付き合ったりすることも無くなった。
女性の嫌な部分ばかり見てきたせいだろう。金やら仕事やら、そんな繋がりの女性はどんなに身体が欲情していても心が拒む。
自分でもばかばかしいとは思っている。女が自分をそういう風に見るのなら、自分だって女をそれ相応に扱えばいいだけだ。だがそれもできないただの臆病者。結果、ひとりでなんとかするしかなくなっただけなのだ。

そのくせまだ、未練がましく信じている。
いつか自分を愛してくれて、自分も愛せる女が現れると、期待している。愚かだと思う。

「……下らぬ質問をしました。お許しください」

「気にするな、少尉。別に隠しているわけではないからな。
古くからいる連中は知っている話だ」

中佐は入隊してから今までずっと前線にい続けている。軍隊という性質上、古くからいる連中というのは、どんどん減っていく。結果誰も知らない、それだけだ。
司令官であるディオヘネス中将は全て知っている。何しろヴァルをここまで引っ張り上げたのは彼だから。今回副官を押しつけてきたのも中将の差し金であることはわかっていた。
だから同じように押しつけられたガウェイン大佐にわざわざ伝書鳩のような真似をさせたのだろう。いつもだがムカつくおっさんである。
自分が副官といい感じになってそのまま結婚して幸せだからって、他人にも同じことを押しつけやがる。お見合いのつもりなのかもしれないがかなりの余計な御世話だ。

「……まあ、そろそろ腹をくくれってことだな」

ヴァルは手の中できりきりと悲鳴を上げていたカップを一瞬で粉々にすると、破片を手を鳴らすように払った。

過去（後書き）

というわけで中佐のトラウマ話でございました。
この続きは現時点ではあんまり考えてません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1681t/

上官の苦悩

2011年5月13日22時10分発行